

## 大賞 [留学生の部]

NRI学生小論文コンテスト2010  
日本から未来を提案しよう!  
「日本が世界のためにできること」

入賞作品



実体験に基づく留学生らしい視点が評価されました。日本人の「気づかいの感性」を世界のユニバーサル・デザインに活かすという提案も秀逸でした。

# 日本にしかできない ユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

ヒューマンアカデミー日本語学校

## 李 璣

い する (韓国)

## トイレで慌てた経験

日本に初めて来た時、駅のトイレですごく慌てたことがある。水を流す装置がなかったのだ。周りを見てもレバーは見えず、ボタンみたいな物もなかった。外には人がどんどん長い列をつくっている。必死に何かないかと調べたら、壁と一体になっているある機械を見つけた。日本語で「手を近づければ水が流れます。」と書いてあった。その説明だけで、見てすぐ分かるような手の絵もなかった。そのようなタイプの装置は初めて見たので慌てたが、私は日本語を知っていたので無事にトイレから出ることができた。しかし、日本語

を知らない外国人や昔のトイレしか知らないお年寄りだったらどうするのだろうか。水を流せない確率が高いと思う。これでは皆のためのトイレではない気がする。

## 日本の ユニバーサル・デザイン

しかし、私が経験した日本のトイレは、確かに「力がない人も使いやすいトイレ」であり、細かいところまで配慮して公共トイレを作った日本人の発想に感心した。このように、社会的に弱者と言われる人々にも配慮してデザ

## 日本にしかできないユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

入賞作品

インすることを「ユニバーサル・デザイン（以下、UD）」と呼ぶ。UDはアメリカから始まった概念で、国籍、性別、障害の有無や年齢などに関係なく、皆がもっと安全で便利に利用できるように製品、建築、環境、サービスなどを設計することである。UDの理論的な基礎は西洋から始まったが、70年代から少子高齢化が進んだ日本も積極的に受け入れ、研究している。

私が素晴らしいと思ったのは、日本のUDがただ政府の掛け声ばかりではなく、社会全般に、社会のすみずみにまで、例えば駅のトイレにまで広がっていることだ。UDに対する日本政府の関心はかなり高く、経済産業省が中心になってUDの世界標準の一つ「ISO/IECガイド71」を開発した。このような努力は政府だけのことではなく、地方自治体も高齢化、国際化、情報化のためにUDを積極的に受け入れ、地域施設に適用している。それにトヨタ、TOTOなどの民間企業でも、UD7原則に基づいた独自の基準を適用している。これはもちろん日本に高い技術力があったから可能だったことだが、私が驚いたのは日本の技術力だけではない。技術力なら、韓国も同等の設備ができるほど高い。しかし、今韓国で公共トイレを補修しようとしたら、皆のための使いやすいトイレではなく、見せるためのキレイなトイレが作られるだろう。また公共施設だけでなく、韓国のトップ・レベルだと言われる病院でも、日本

の駅のトイレにあったような装置は、私は見たことがない。つまり我が国韓国では、日本のような技術力はあるかもしれないが、日本のように弱者を配慮しなければならないという考え方自体がまだ定着していないのだ。官民がお互いに協力しながらUDを発展させている日本の状況を見て、うらやましく感じると共に、日本が先進国と言われるゆえんが分かったような気がした。

## 日本だけの力

その一方で、日本の公共UDを観察すると、少し足りないところがある。上記に示したトイレも、水が流せる装置がどんなにいい物であっても、その使用法が分からず使えなかったら、その装置は要らない物になるのはもちろん、水を流せなかった利用者の恥ずかしさや悔しさはどうすればいいのか。特に、社会的に弱者だと言われるUDが必要な人々は、無意識のうちに社会に対する被害者意識や不安感を持っているはずだ。その人達に対してもっと繊細な配慮が必要ではないだろうか。私は、日本にはすでにこのような問題を解決する力があると思う。UDではないが、次の例でその手がかりが見つけられるだろう。

## 原研哉の梅田病院のサインデザイン

日本の代表的なデザイナー、原研哉がデ

## 日本にしかできないユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

入賞作品

デザインした梅田病院（産婦人科）の内部サインには、出産が迫った妊婦の精神的、感情的な部分に対する配慮が感じられる。原は病院の内部のサインを白い布で包んで、その上に赤い文字やピクトグラムをシンプルに表した。大部分の布カバーは取り外しが可能で洗濯もできる。このやり方は汚れやすい物をいつも清潔にしておくという病院全体の姿勢までも含んでいるようだ。

では、なぜ原は、このようなサインの形を作り出したのだろうか。金属やプラスチックだったらもっと清潔を維持できるのはもちろん、費用も安くて済むだろう。しかしよく考えてみよう。病院と言うと冷たく怖いイメージを

持ちやすい。もちろん患者に信頼される医療技術が重要だが、患者は体や心が弱くなっていて、柔らかく和やかな雰囲気の中で安心させてもらいたいという気持ちも強いだろう。精神的に安心できればその病院の医者や技術も自然に信頼されるのではないだろうか。

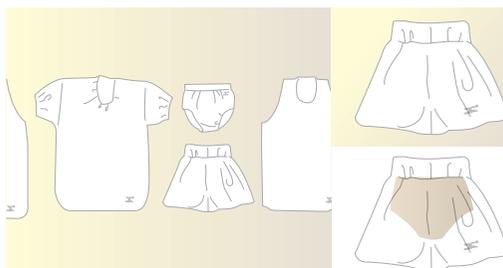
### 津村耕佑のオムツの提案

もう一つの例として、原研哉の著書『デザインのデザイン』に書かれている「オムツ」の話をしたい。これは日本の有名なデザイナーに、すでに日常的に使われている物をテーマとして投げかけて、彼らから発想の転換により生まれたアイデアを集めた「リ・デザイン」

梅田病院のサインデザインの形——白い布カバーの上に情報をシンプルに表したイメージ



左：ウェア一式／右・上：オムツのトランクス／右・下：後ろからトランクスに光を映したイメージ



## 日本にしかできないユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

入賞作品

というプロジェクトの一つである。

服飾デザイナー津村耕佑に投げかけられたテーマは「成人用紙オムツ」。今も成人用オムツはあるが、その形は子供用のオムツとほぼ同じだ。もし自分が急に排便の調節ができなくなったら、すぐそのようなオムツを使わなければならない。しかし、自分が急に子供みたいにオムツを着用することになったらどんな気持ちだろう。多分悲惨な気持ちではないだろうか。しかし、津村耕佑がデザインしたオムツは、トランクスに見える。それだけではなく、オムツと一緒にランニングシャツ、Tシャツのようなものなど、人の体液を吸収するための「ウェア式」を提案した。

それぞれのウェアには小さい文字で数字がついていて、この数字はそのウェアの吸収性のレベルを表している。軽い汗を取る程度のシャツはレベル1、一番吸収力が高いオムツはレベル3である。だから自分がオムツを使わなければならない状態になっても、ただ吸収性が高いレベル3のトランクスを選べばいい。そうすれば恥ずかしさはほとんど感じなくても済むのではないだろうか。UDもこのような感覚が大切だ。

## 気づかいの国、日本

このような斬新な発想が生まれた手がかりを日本の文化の中を探ることができる。例えば、コンビニエンスストアでも客に配慮して、客が見て正面になるようにお札をわたす。日

本では、外国人が「こんなところまで考えなきゃならないの?」と思うほど相手を配慮する「気づかい」という精神文化がある。これは、「Yes」という相手の答えをそのままにしか受け取れない西洋文化が持っていない、日本だけの強みだ。技術力だけあればできるというUDの研究は、西洋のほうが進んでいるのかもしれない。しかし、西洋のUDは効率中心の思想が強くて、人間の温かさが感じられない。合理的な思考や経済的な論理が支配している西洋なら、利用者の気持ちまで配慮しないUDでも文句は出ないかもしれないが、それは配慮があるUDを利用した経験がないから分からないだけではないか。身体より精神的なことがだんだん重要になっている現代社会では、もっと高い次元のUD、つまり「感情的な配慮があるUD」に進むべきではないだろうか。

もっと高い次元の  
ユニバーサル・デザイン  
を目指して

これは日本にとってチャンスだと言える。相手が話さないところまで気づかうのが当然であるという文化を背景として、高い技術力、多様に開発している新素材、世界的に認められているデザイン力をうまく利用したら、日本は、世界統一規格になり得るUDの開発

## 日本にしかできないユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

入賞作品

ができると思う。例えば、日本でもよく見られる手すり。階段を上りやすくするための基本的なUDの設備だ。しかしその手すりの素材は金属の場合が多い。素材自体や、加工、管理にかかる費用が安く、設置もしやすいからだ。多分西洋の手すりを見てそのまま受け入れたのだろう。しかし、外にある金属の手すりを考えてみよう。夏には熱くなるし冬には冷たくなる。その手すりを利用しなければならない人は、老人や体の不自由な人だ。金属の手すりが熱くても冷たくても、我慢してその手すりをつかまなければならない。これが本当に弱者のための物なのだろうか。この手すりの素材を布や木の触感だと感じられる、熱伝導率が低い物にしたらどうだろう。プラスチックのように触感がよく、軽く、抗菌ができる新素材を開発するのもいいと思う。最初に開発費がかかるかもしれないが、全国的に適用したら生産費も低くなるし、海外輸出もできるようになるはずだ。

中には、公共施設として手すりをつけるだけでも一般市民の税金がかかるのに、そんな細かいところまで配慮して大事な税金を使う必要があるのかと、懐疑的な視線を送る人がいるかもしれない。しかし、それならUDを開発したのも無駄だということになる。最初は浪費だと思われるかもしれないが、このような過程を通じて、もっと便利で、全ての人に平等ないい世界になるはずだ。人はいつかは年を取って身動きができなくなる。不

意の事故によって障害者になるかもしれない。その時になったら、今まで税金の無駄遣いだと思っていた色々な施設に感謝するだろう。いつか自分の感情にまで配慮してくれていたと気づいた時、自分が住んでいる国に対する思いも変わるかもしれない。

このようなレベルまでUDが発達したら、日本の人口の1/5以上を占めている老人層や体の不自由な人、外国人も、不便を感じることなく社会参加できると思う。ただ体を動かしやすいだけでなく、精神的にも自分が差別されていないと思ったら、人はもっと積極的になれる。一人の社会構成員として自信が生じるのだ。その人達が積極的に消費者や労働者として機能したら、現在、停滞している日本社会の雰囲気をもっと活気づけられる。

## 世界の人権問題に与える影響

さらに広く考えてみると、UDは世界の人権問題にも役に立つ。出生率が低い韓国、もう日本と同じような高齢者人口比率になっている台湾、一人っ子政策のため少子高齢化の問題に急にぶつかった中国など、だんだん発展してきた東洋の国々は、対策を立てる暇もなく、すぐ人口問題にぶつかる。それは、つまりその国々でも、もうすぐUDが必要になるということだ。

## 日本にしかできないユニバーサル・デザインの提案

——感情まで気づかったユニバーサル・デザインで  
人権問題の解決の手がかりを探す

入賞作品

日本より急速に高齢化が進んでいる諸国には、UDを研究する時間も資金もない。その事情を待たず増え続ける老人層。その人達の生活の質の問題は急速に大きくなるだろう。その時、日本で成功しているUDのシステムがあったら、それらの国々は受け入れるはずだ。日本が新しい先進文物の輸出国になれば、経済にもいい影響が望める。日本の先進UDを受け入れた諸国も、開発の時間や資金を節約してUDを社会に適用させることができる。そうして先進UDが東洋の諸国に定着したら、人権の問題の一部が解決できるだろう。今、韓国の老人や体の不自由な人の生活の質は非常に低い。そんな人々が外に出かけてトイレなどで迷ったり、前に進むのが遅くなったりしたら、周りには「体が不自由なくせになぜ出かけたの？」と文句を言う人がいるかもしれない。身動きが不自由な人も出かける権利があるのに、社会にそのような人のための施設が少ないから、周りに迷惑を掛けたくなくても掛けることになってしまう。

しかし日本は韓国より公共UDの施設はもちろん、老人や障害者向けの商品も多いので、そのような人が出かけても不便さを感じることが少ないし、他人にもあまり迷惑を掛けない。だから、身動きが不自由でも出かける人が多く、それが当たり前の社会の雰囲気があるから文句を言う人もあまりいない。スタートはただ、社会的な弱者のための物理

的な配慮だったかもしれないが、このようなUDの一般化は人権を守り、平等な社会生活につながると思う。

人々の考え方を変化させるのは、周りの環境の変化だと思う。弱者のための施設や制度がよくなり、そのような配慮が当然なことになったら、人々には知らず知らずのうちに弱者の人権に対する望ましい意識が生じる。一度高められた先進的な意識は後戻りをしない。そうしたら世界はだんだんいい世界に進むだろう。いいUDを通じて人権が守られ、人権に対する人々の意識が大きくなるのだ。これが今、世界の国々にとって重要な問題の一つではないか、日本が世界のためにできることではないか、と私は考える。日本には、UD先進国としての自覚を持って世界に寄与することを望む。

ウェブリソース

- ・日本大百科全書(小学館)
- ・doopedoa
- ・ウィキペディアの「ユニバーサルデザイン」(日本語版と韓国語版)
- ・ISO/IECガイド71  
<http://sky.freespace.jp/maika/wag/guide71.html>

参考文献

- 原研哉『デザインのデザイン』岩波書店、2003年(pp71～77、pp48～51)